

古典作品との関係性

——田辺聖子における「もののあわれ」の深化について

呉羽 長

一 田辺聖子の古典受容と「もののあわれ」

田辺聖子は古典作品を踏まえた自らの創作の方法を、『沙石集』を材にした一つの短編小説を例に明らかにしている。

『沙石集』の話とは、巻第七の六「嫉妬の心無き人の事」の中の、天文博士と朝日の阿闍梨という僧の関わりをめぐる一話である。天文博士の妻のところに忍んで通っていた朝日の阿闍梨が、ある時博士が帰って来たので、西の遣戸を開けて逃げようとした。それを見て博士が「あやしくも西に朝日の出づるかな」と詠みかけると、阿闍梨は即座に、「天文博士いかが見るらん」と返す。そのとっさの対応に感心した博士は阿闍梨をよびとめ、「さかもり・連歌」などして、妻との

浮気を許すことになった⁽¹⁾。

この筋立てが「びっくりハウス」(小説セブン 昭和四四・九、単行本は『ここだけの女の話』昭和四五・二、新潮社)に生かされている。夢野町のタクシー運転手の「私」が仕事で妻の浮気を発見し、妻に詰め寄るが、妻にまともに相手にされず、怒りが納まらないまま友人の本間の助けを借りて相手の男を呼び寄せ慰謝料を求めた。その交渉が滑稽なやりとりを経て双方合意に至った後、相手の男や彼に付き添っていた叔父と仲良くなり、親密な交際が「私」のアパートで続いている、というものである。ここでの原話を生かすあり方は、その原話の表現レベルでの踏襲とは違い、妻の浮気を知った男と相手の男との関係とその展開に発想を得ているという点

で、田辺の古典再生の特徴を明かすものといえる。この作品について田辺は次のように述べている。

私の意図したところは、けつきよく下敷きにしたのは朝日阿闍梨の話でございますが、こういうふうにいり合っていた人間が、最後に対立が解けていって、両方とも仲良くなってしまうて、全部ご破算になってしまつて、みんな親友になつてしまつて、知らない人も知る人と同じようにまじり合つてしまふ。これは一つの時の流れ、それから人の精神の流れと云いますか、あとになつてむつかしいことがいえるんですけれども、私はそういうもので、「もののあわれ」を見ようとしたわけなんです。（恋愛、山崎正和・山田宗睦・田辺聖子・橋本峰雄の各氏による共著『日本人の美意識』、朝日新聞社、昭和四九・七所収）

天文博士の風流心が、目先の憤りを超越して、同じく風流心をもつ阿闍梨の心と同調した。博士は意識を現実と別の、より高次なところに離して、いわば自分を別人のごとくに眺めることのできる人であつた。田辺は「びっくりハウス」の人物たちにそうした余裕あるものの見方を意識化させてはいないが、そのように対立が解消し皆が仲良くなるような心の

余裕を田辺自身が意識し、またそれが日本人の精神の流れとして存在するものであることを指摘しているのである。

この「恋愛」という文章は、日本人の精神の流れを恋愛において捉えようと試みたもので、仁徳帝の後磐之媛や『蜻蛉日記』作者藤原道綱母をはじめ、近代の与謝野晶子に至るまでの女性の恋愛史を辿つてそこに貫かれる女性的情意を語るものであるが、そうした恋愛の文化の根底に、田辺は「もののあわれ（もののあはれ）」を見ようとする。彼女は同じ文章の中で「もののあわれ」について、次のように述べている。

本当の「もののあわれ」の意味をいいますと、これは自然観照の美学だとか何だとか、いろいろむつかしいことが源氏学者たちによつて説明されておりますけれども、私は現代に当てはめた場合の「もののあわれ」というのは、人生のちよつとしたことにちよつとほほえむとか、笑わせられるとか、人生つてなかなかいいもんだ、生きていると、ひよつとしたらいいことがあるかもしれないと、みんなが一縷の希望を抱きながら生きてゆく——（中略）そういうふうな、ちよつとした浮世の中にある話でありながら、一点浮世離れたというふうなものが「やさしみ」であり、「もののあわれ」であり、そ

ういうものを見つけてゆく能力というものが、「教養」というものではないですかね。

右の記述から推して田辺の考える「もののあわれ」とは、現実の人生の中でささやかな出来事に生きている喜びを感じる、余裕ある精神の姿というものであろう。それは「やさしみ」と言い換えることができるものであり、それを確認できる能力を「教養」としている。右の言は田辺が「もののあわれ」に思い及んだ当初のもので、話しことば故の表現の不熟と思われる点も認められるが、こうした「もののあわれ」観は、古典との対話において人間への洞察を深めていく彼女の中で深化していく。田辺の古典受容を概観しながらその内実を確認したい。

二 『文車日記』とその後の古典受容

前節で示した「恋愛」の文章は田辺聖子が『文車日記——私の古典散歩——』（昭和四九・一一、新潮社、以下『文車日記』と略称する）を執筆していた時期に書かれたものである。『文車日記』に掲げられた古典作品も「恋愛」の中に掲げられていて内容の重なりが認められるところであり、以下この『文車日記』を起点に田辺の古典受容の展開を押さえ、「ものの

あわれ」との関連を探ることとする。『文車日記』は、約五十に及ぶ日本の古典作品について六十七項目にわたって作品中のすぐれた場面を紹介しながら田辺が捉えた魅力が明らかにされている。その魅力は、田辺の繊細な感性をもって、各作品に湛えられた真情を素直に読み解くところに現れる。

田辺の古典との親昵は、少女時代からの古代ロマンへの憧れをはじめとする。『文車日記』にも、「額田女王の恋（萬葉集）」「あね・おとうと（大津皇子と大伯皇女）」「わが愛の聲之媛（萬葉集）」「庭たづみ（記紀）」「白き鳥の歌（ヤマトタケルノミコト）」など記紀・萬葉を踏まえた作品解説が書かれているが、そうした憧れの反映と併行して、またそれとの繋がりにおいてこの時期には古典作品を、恋や愛の種々相を描き出すものとして捉える姿勢が窺える。彼女は『千すじの黒髪わが愛の与謝野晶子』（昭和四七・二、文藝春秋社）の中で、三十代前半の自己を顧みて次のように述べている。

私はその頃、小さなはかない恋の小説ばかり書いていた。女にはそれよりほか、書くことはないように思われた。恋の小説は、女にとつていつまでも終わらない、永遠に未完の作品であつたから、いくつも書けた。私は、その世界がすべてだと思つていた。

三十代前半には同人雑誌「航路」「のおと」などに小さな恋の小説を書きつづっていた田辺は、更に三十代後半、四十代と、「感傷旅行」（「航路」昭和三八・八）、「うたかた」（「小説現代」昭和三九・六）、「女の食卓」（「河北新報」昭和四一・一二・一）同四二・二・一五）、「猫も杓子も」（「週刊文春」昭和四三・一九・九）同四四・七・七）、「求婚旅行」（「サンケイ新聞」昭和四七・七・二四）同四九・三・一一）などに多様な男女の恋の相を描き、そうした彼女の好尚に合う形で、古典作品には不定形の魅力ある恋がちりばめられていたといえる。

『文車日記』でも、そこに取り上げられた古典作品の多くは男女の恋や夫婦などの情愛に關してのものである。例えば、「恋の見本帳（伊勢物語）」では、『伊勢物語』の中で様々な恋に深く入りこむ在原業平の「色好み」の魅力を捉え、「男の友情（金家物語）」では、敗残の木曾義仲一行の中にあつて、義仲とともに最期を遂げることを望みつつ義仲に拒まれて戦場を去ることになった巴の悲しみに男女の恋の本来の姿を思ひやつている。また「恋のあはれ（徒然草）」では、『徒然草』について、恋の情趣について評論しつつ距離を保つて女性と関わろうとする吉田兼好の態度に「ほんとうの

女、ほんとうの恋」を知らぬ人としての人間像を推測している。また「ありがひもなき世間（沙石集）」では、横災に遭つて遁世しようとする貧しい夫に賢明な処世を示す妻を描き、世間体よりも夫婦の愛を優先する姿に好意を寄せている。

田辺のそうした男女の愛を捉える根底には、滲み入るような情緒に対する感受性が読み取れるところである。「舟と琴（古事記）」では、琴の「枯野」の話に古代的想像力の豊かな結実を見て、仁徳の孤独に思い及び、「女の子（土佐日記）」では、『土佐日記』の中で紀實之が亡児を偲ぶ心の内に追隨して「全編に、何ともいえない、美しい悲哀のようなものがあふれ、それが、この日記に、気品ある透明感を与えています」と述べ、『土佐日記』の精神的基調の特質を捉えている。また「国庁の雪（大伴家持）」では、家持のデリケートで美しい感性に共鳴しつつ、天平宝字三（七五九）年以後歌わぬ歌人として汚辱に満ちた世界を生きる彼について、「家持は「今日降る雪のいやしけよ」とと呟き、暗い時代への憤りを胸に秘めつつも、やはり幸せへの期待を抱かずにはいられなかったのかもしれない」と、持ち前のロマンチズムを添える。

恋の小説の創作と併行して深い古典味読が行われていたことを示すこれらの言及は、古典作品を限定した上でそれぞれの作品としての魅力をより焦点化しつつ田辺の生活感覚を込め入れて、『小町盛衰抄 歴史散歩私記』（昭和五〇・五、文藝春秋社）、『古典の森へ 田辺聖子の誘う』（昭和六三・八、集英社）など豊かな古典解釈に展開していく。『古典の森へ 田辺聖子の誘う』では、十四の作品について、それぞれの全体像を押さえた上、田辺の把握する作品のエッセンスを魅力として提示する。また一方で『文車日記』で捉えられた作品はそこで指摘された魅力を核にして多様に再生がなされている。『文車日記』の中に掲げられた項目に従えば、「これ小判（川柳）」「おちくぼ（落窪物語）」「薄幸の皇后（枕草子）」「魅惑の男（蜻蛉日記）」「雪ちるや（小林一茶）」などは、それぞれ『古川柳おちひろい』（昭和五一・九、講談社）・『舞え舞え蝸牛 新・落窪物語』（昭和五二・一、文藝春秋社）・『むかし・あけぼの 小説枕草子』（昭和五八・六、角川書店）・『田辺聖子と読む蜻蛉日記』（昭和六三・六、創元社）・『ひねくれ一茶』（平成四・九、講談社）などの創作や評論に発展する。それぞれの内容を示せば、『古川柳おちひろい』は、『俳風柳多留』など江戸庶民の中に流れるユーモア感覚のこもつ

た秀句を選び、男女の心の微妙な味わいや大人の距離感をもつた温かい笑いの感覚を描き出し、『舞え舞え蝸牛 新・落窪物語』（昭和五二・一、文藝春秋社）では、原典の『落窪物語』の骨格をふまえて筋立てを整え、庇護者も財産もない姫君が主人公の貴公子に愛されて栄華を極める、純愛のシンデレラ物語としている。

また、『むかし・あけぼの 小説枕草子』（昭和五八・六、角川書店）は、一条天皇中宮定子に仕えた清少納言が、美しく怜悧で心優しい定子を憧憬し思慕しつつその定子サロンに自らの才能と陽気な性格を発揮して生きる姿を縦糸にして、そこに橘則光や藤原棟世といった男性たちとの交際や別れを挿んで、その限られた輝かしい時間の意味深さを描くものである。『枕草子』のほか『栄花物語』『大鏡』『今昔物語集』等の作品に取材しつつまた田辺自らの結婚後の生活の様子なども生かして、清少納言の人生の軌跡を作り出し、そこに清少納言以外の人物の価値観をも添えて、人生を味わい深く充足して生きる多様なあり方を示している。

更に『田辺聖子と読む蜻蛉日記』（昭和六三・六、創元社）では、『蜻蛉日記』作者の、女性特有の狭い考えや発想に田辺自身共鳴と違和を感じながら、作者の夫藤原兼家との心の

行き違いやむなしさを克明に綴り続けて、やがて苦悩の末に深い人生観照と静謐な心境を得るに至る心の軌跡を辿り、男女の愛の世界の奥深さを読者に思い致させる。

『ひねくれ一茶』（平成四・九、講談社）については後述するが、これらの田辺作品では、その原典の魅力を捉えるあり方としては『文車日記』の段階でのそれと変わらず、作品把握の洞察の確かさが確認できる。そうした把握の上で、それぞれの時期の田辺の生活感覚や人生認識が注入される。作品中に描かれる恋愛についても、執筆の年代が下がるに従い、より広やかで深い認識がなされていることが窺われる。

このように『文車日記』から展開する古典作品に描かれる種々の恋愛を読み解きそれを時間の中で捉え直すとき、恋愛に対する日本人の精神の流れが浮かび上がる。そこに現れた恋の諸相が女性的発想・感覚によつて精神の余裕「やさしみ」をもつて捉えられるとき、「もののあわれ」の美意識が発動するのである。

三 『源氏物語』受容について

これまで田辺聖子にとって古典文学は、

①少女時代からの古代ロマンの世界への憧れと親昵を促す

もの（『古事記』『日本書紀』など）

②三十代以降に創作をおこなう際、そこに不定形の様々な恋がちりばめられていて彼女の好尚に適用もの

であったことを述べた。そして、右に見た『文車日記』執筆の頃から田辺は『新源氏物語』の執筆をおこなっている（初出は昭和四九・一一・八〜同五三・一・二七、「週刊朝日」。この『源氏物語』の私訳は、彼女にとって原典の「悲しい小説」としての内実と向き合う営みであり、彼女は古典文学と新たな関係をもつ段階に入つたといえる。⁽⁴⁾

ほんとうに幸福な人間は、この中に幾人いようか、源氏も紫の上も、薫も匂宮も、それぞれに不幸である。あきたりぬ人生である。栄華をきわめつくした源氏でさえ、愛する人に次々と去られてしまう。薫は恋を片端から失つてしまふ。失意と憂悶のうちに巻は閉じられる。（『年々歳の源氏』、『源氏物語の世界第三集』昭和五六・二、有斐閣）

『新源氏物語』は原典の光源氏の物語（正篇）と対応するものであるが、「失意と憂悶」が終末に控える『源氏物語』正篇を私訳するに際して、田辺はしかし原典の世界にうろこいある心情を添えて「若菜」巻以降の悲しみと向き合っている

る。

本論の最初に、「恋愛」の文章を掲げ、「もののあわれ」は人生における余裕ある精神の所産であることを示した。それは目前の対象をより高次の意識で見つめ直す「やさしさ」において現れる。こうした相対化の心の働きは、源氏の老晩の悲しみに新たな意味を見いだす力になるものであった。『新源氏物語』を書き終えた段階で、田辺は『源氏』離れともいうべく、その深刻な様相に対して、『私本・源氏物語』（昭和五五・一）・『新私本源氏 春のめざめは紫の巻』（昭和五八・五）・『異本源氏物語 恋のからたち垣の巻』（昭和六二・四、ともに実業之日本社）というパロティ形式の作品を描いている。ここで田辺は『源氏物語』の作中人物を戯画化するという形で現実の深刻さから自由になることをはかり、原典の深刻さを相対化する中で、自らの人間洞察の健やかさを披瀝している。

そうした創作の後、『源氏物語』の男たち（平成二・一）では、紫上を失い失意の中に佇む源氏の姿を叙したこの物語に、「不思議にさわやかで静謐」なものを読み当てている。それには彼女が『新源氏物語』の私訳の中で温めてきた紫の上観が力を与かったものと思われる。

・紫の上は源氏の人生の底音部でいつも鳴りひびいているやさしいメロディであったが、源氏の生涯が終り近くなったとき、突如それは爆発的な主旋律として噴き上がった。紫の上の愛、というより、大慈大悲のめぐみが、失なわれたいま、源氏の身に泌みる。

失われたときに、愛はよみがえる。

・自分の死の悲しみよりも、あとに残る源氏を思いやる、無我の大きな愛に紫の上はみちみちている。光明遍照十方世界は紫の上の心にある。男の好色心に何度か絶望し、男と女の間の埋めがたい深淵を嘆きつつ、なおそれを超えて紫の上は源氏を大きい愛で抱擁する。

（ともにⅠ「ミスター・光源氏の場合」）

このように紫の上を捉えることで、源氏の物語終末の悲哀の根底にある明るさを探り当てたといえる。

この後田辺は『源氏物語』の続篇、宇治の物語を材として『新源氏物語 霧ふかき宇治の恋』（単行本は、平成二・五、新潮社刊）を執筆するが、併行する小説創作においては、その長短編の中で男女・老若を問わず一人一人立場の違う生き方への深い共感を内に取り込み、従来以上の切実な生の状況の中に作中人物を造型するなど、多様な立場の人間に追随し人

生の哀歎を描くなどしており、これが彼女の『源氏物語』に対する縦深な読みを促すものになった。つまり、この時期田辺は『春情蛸の足』（昭和六二・七、講談社）、『うつつを抜かして オトナの關係』（平成元・六、文藝春秋社）、『結婚ざらい』（平成元・九、光文社）、『ブス愚痴録』（平成四・四、文藝春秋社）などを描き、それぞれの人生に深入りする広やかな感受性が「悲しい物語であるが、それは昇華されて、生きる喜びにたかめられている」（前掲「年々歳々の『源氏』」内実を採り当てているのである。⁽⁵⁾

『霧ふかき宇治の恋』の中で物語の最後のヒロイン浮舟は薫と匂宮の間を往来し呵責のあぐく死を決意して、後に横川僧都に助けられる。その経緯の中、彼女は僧都の導きで出家を遂げる。この後浮舟は、還俗せぬまま仏にすがって自らの罪の浄化のために心の鍛練の道を進むことを決意する。その心中思惟は、『霧ふかき宇治の恋』の中で、「やがてはわたくしの罪も消え、そこどころか、一切衆生のために幸せを祈られるような悟りを得るまで、み仏におすがりして生きよう。」「やつと心がきまつたわ。……いいえ、これから先もまだまだ、悩みや迷いが多いかもしれないけれど、でもやがてはみんな、なつかしいといしものに思えるような日がくるかも

しれないわ……」（「ふみまよう夢の浮橋の巻」と描かれる。

『源氏物語』原典で浮舟は、仏への救済の期待というよりもむしろ薫と匂宮に心寄せた深い罪におののきを新たにしないで不安定な状態のまま心を固くしている。それに対して田辺の作り上げた浮舟は、苦悩の極限を経由した果てに清らかな心の世界を遠望し、一切衆生に人間存在のために祈りをもてるような悟りに向けて自らを持そうとしているといえる。そこには薫に対する充溢した愛情が窺える。その薫を見る視座は物語操作者たる田辺の視座とも重なり、田辺は浮舟をその位置へ引き上げることによって浮舟の救いを確保しようとしたのである。⁽⁶⁾それは悲哀を生きるものを高い次元から「やさしみ」をもつて見つめる「もののあはれ」の眼差しといつて良い。田辺におけるこうした『源氏物語』の固有の読み深めが、前節で辿った他の古典作品の受容・再生と併行しておこなわれていたのである。

四 「もののあはれ」の深化について

『新源氏物語』の終幕で「もののあわれ」の言及がなされている。源氏は紫上を失った際に、明石の君の前で、藤壺や紫の上との死別の悲しみを打ち明ける。

もののあわれ、というのは単に恋や愛情から生まれるのではないね。その人といかに深く広く、人生でかかわりあつたかということなのだよ。夫婦だつたからあわれをおぼえるのではない。幼いときから育てて、何十年かを共に暮らし、あまりにも共有した思い出が多すぎるのでね……（夢にも通えまぼろしの面影の巻）

このように源氏が語ることには、生前深く結び合つた紫上との相互の連帯が、彼女の非在の欠如の悲しみの底に流れ、源氏の老晩の生を支えているという田辺聖子の読みを確認することができる。

菊田茂男氏は「もののあわれ（もののあはれ）」の美意識について、それが「不測・欠如の存在を感じることによつて成立する」とし、その美意識は「やがて人間存在の孤独・無常を知らしめ、他者との間に横たわる深い溝をも告知するに至るだろう」と述べられる。そうしたありようは、人間が実存の深淵と直面する姿でもある。更に氏は、

このような人と人との断絶に架ける橋は求めえないものなのか。本居宣長は『紫文要領』の中で「人の哀なる事を見ては哀と思ひ、人のよろこびをきゝては共によろこぶ、」と書いている。「もののあはれをしる」という体験

を媒介にして、「共感」の精神が養われ、「連帯」の倫理が形成されるのである。（中略）「もののあはれ」によつて招来された孤独感は、「もののあはれ」に内在する「共感」と「連帯」への意識によつて慰撫されることになるのである。（「もののあはれの美意識」、「國文學」昭和五一・六）

と述べられ「もののあはれ」に内在する共感と連帯への志向を指摘されている。そうした志向性を保証するものが、人間性に対するオプティミズムであつた。

田辺の小説の特徴の一つとして、人間の生きがたい悲しみに暖かい情愛を付してそれを生きるに値するものとするというモチーフがあげられる。それは「人の哀なる事を見ては哀と思」う共感・連帯への意識を抱きつつ、その実存の深淵にある姿を相対化し、精神の向日性をもつて捉える心の働きに由来する。例えば、「二階のおっちゃん」（うつつを抜かしてオトナの関係）平成元・六、文藝春秋社）では、若い男に妻を奪われ死を目前にした老いた男のまわりに善意を添えて、

おっちゃんが夜の湯舟に降る雪の泡のように消えていった如く、私もいつかはこの世から消えてゆくのでしよう。しかしおっちゃんのおかげでできた息子やら―武田マサ

子の娘やらのことを考えていると、奇妙に私の心は明るんでくるのです。——やっぱりこの世はいいもんなんでしょね……自分では当分、そうする気はありませんが、もし体が動かなくなったらあの二階へいくのでしょうか。虎夫が見舞いに来てひとこともいわなかったのも、(ごめんさい)の代りでしょう。わたしはゆつくり、吸い飲みの番茶を口に含みました。番茶はとてもおいしかったです。

と語らせており、主人公の悲しみの清らかさの根底にある精神の明るさを、「もののあわれ」の現れとして見ることでさる。

現実の生の上降性を情意によって回復しつつ、作中人物に「やっぱりこの世はいいもんなんでしょね」と語らせるこうした精神性は、田辺が、『源氏物語』以下の古典読みを経過する中で、人間存在を根源的信頼において見る姿勢を確かにしていったことに由来するのではないか。

田辺は『霧ふかき宇治の恋』の後、老いを題材とする中で古典と対話している。『姥うかれ』(昭和六二・一二、新潮社)の中には、

紫の上を亡くしたときの光源氏の悲しみには、埋められ

ない男の孤独があつて、やっぱりこれは「愛の小説」だとうっとり思つた。(「姥蜃」)

と述懐し、「死に近き老齡の源氏の君が、ともに老いようと思つた紫の上に先立たれる、そのかなしみに強く共感する」主人公の姿が見られるが、これは「幻」巻で紫上の愛を反芻する源氏の清らかな悲しみに発するものであり、そのような解釈を成り立たせる田辺の深い人間理解と固有なオペティズムに由来が求められる。それが背景に生の暗さを控へつつ、刹那の時間を淨福として楽しむ主人公の知恵を作り出しているものと考えられる。

更に『ひねくれ一茶』(前掲)は、俳諧師小林一茶が、江戸での生活から奥信濃の郷里へ帰り命を閉じるまでの姿を、彼の詩心が作り出す句の魅力を示しながら辿るものであるが、田辺は、不遇の少年時代を送った故の一筋縄でいかない一茶の性格の底にもつ澄んだ詩人の目と童心を膨らまし、「ひねくれ」の内側の人間性に肉薄している。そして、帰郷後幼い子供たちを次々と亡くし妻にも先立たれ、家を失つた老残の彼に、おやお、という後妻の優しさを添えて、その幸福に見放されたような最晩年に慰謝を与えている。そこには紫の上が源氏に注いだような温かい眼差しが及ぼされてい

ることを認めることができる。田辺が様々の古典文学と深く結んだ関係が、「もののあわれ」の美意識の発動の対象として一茶を取り込み、彼の人生に「大慈大悲」ともいえる眼差しを注ぐことを可能にしたのであろう。

〔注〕

(1) 本文は筑地鈴寛氏校訂『沙石集』下巻、岩波文庫による。

(2) 岡崎義恵氏は「世界観の情調性」(『日本文芸の様式と展開』昭和三七・一二、宝文館出版)において、「あはれ」は対象への排撃を含まず、対象の持つ意味と、自己の求める価値との間に葛藤がない。無構築的に主客両体が融合しようとする。そこには軟らかい和平があつて、ただだけの闘争がない。根本的には女性的なものである。」と述べられるが、氏の指摘は恋愛を女性的発想において捉える田辺の「もののあわれ」観の内実と大きく繋がりをもつものと思われる。

(3) これらのうち、『古事記』に関する解説は「田辺聖子の古事記」(昭和六一・一、集英社)に発展し、「わが愛の磐之媛(萬葉集)」「庭たづみ(記紀)」などに取り上げられた記事は、少女時代からの古代ロマンへの憧れが結実した『隼別王子の叛乱』(昭和五二・一、中央公論社)に生かされている。『隼別王子の叛乱』の作品把握の詳細については、拙稿

「古代幻想の酒壺に熟成した青春のロマン——『隼別王子の叛乱』『不機嫌な恋人』論——」(『田辺聖子全集4』平成一七・五、集英社)を参照いただきたい。

(4) なお、『文車日記』では『源氏物語』について、「夕顔」巻・「若紫」巻をめぐる限られた場面の言及がなされるに過ぎない。『文車日記』執筆の時期は、『新源氏物語』の執筆を始める頃であり、『源氏物語』についての彼女なりの見解がなされるには時間が必要であつたかと思われる。

(5) 「相対化」という点では、一つの題材について、それを見る見方の違いで別の趣向・主題の作品が作られることがある。例として「壺坂」(人間ざらい)昭和五三・二、新潮社と「偕老同穴」(三十過ぎのぼたん雪)昭和五三・三、実業之日本社)の場合があげられる。こうした形での相対化の試みにも、田辺の人間把握の深まりを窺うことができる。

(6) ここに述べてきた田辺聖子の『源氏物語』受容の詳細については、拙著『源氏物語の受容——現代作家の場合——』(平成一一・一〇、新典社)の五「田辺聖子(その1)」「新源氏物語」に至る『源氏物語』体験および六「田辺聖子(その2)」「新源氏物語霧ふかき宇治の恋」にみる『源氏』観の変容」を参照いただきたい。

(くれば・すむ 富山大学教授)